

音も高師の山に來にけり

十六夜日記云、たかしの山もこへつ、海見ゆる程いとおもしろし、浦風あれて松のひゞきすこく浪いと高し。

○わかためや波も高しの濱ならん

袖のみなどの風はやすます

◎橋本 白菅より一里斗り東なり、むかしは宿驛なり、

◎濱名橋

十六夜日記云、濱名の橋より見わたせは、かもめといふ鳥、いとおふく、飛ちかひて、水のそこへも入る、岩の上にも居たり。

○かもめゐるすさきの岩もよそならず

波のかけこそ袖に見なれて

光行記云、橋本といふ所につきぬれば、聞わたりしかひありて景色いと心すこし、南には海湖あり、漁舟波にうかふ、北には湖水あり、人家岸につらなれり、其間淵崎とふくさし出て、松きひしくおひつゝき、嵐しむせき松のひゞき波の音い

つれも聞はきかたし、行人心をいたましめとまるたくひゆめをさますと云事なし、水海にわたせる橋を濱名となつく、古き名所なり、朝たつ雲の名残いつくよりも心ほそく。

○行とまる旅ねはいつもかはらねと

わきて濱名の橋そすきうき

◎源太山 荒井にあり

◎濱名湖

とほつらみは、いとみしく、荒き波高くして入江のいたつらなる淵ともこと物もなく、松原しける中より波のよせかゝるも色々の玉のやうに見へていみしくもおもしろし、それよりかみはゐのはなといふ坂のえもいはす、わひしきを登りぬれば、三河の國高しの濱といふ、

貞應海道記云、橋本をたつ橋のわたり行くなり、かへりみれば跡にしら浪の聲はすくる名残を呼かへし、青松の枝はあゆむもすそを引とゝむ、北をかへりみれば湖上はるかにかんて、波のしは水の顔に老たり、西をのそめは湖海ひろ

くはひこりて、雲のうきはし風のたくみにわたす水郷のけしきはかれもこれも同じけれとも湖海の淡鹹は氣味ことなり。

○高師山こへ来て見れば濱松の

すし遠き浦の入らみ

◎今切

〔後土御門院御宇、明應八年六月十日大地震して、湖と湖との間切て海とひとつになりて入海となる是を今切といふ。〕

丙辰記行云、遠州濱井の濱より奥の山五里斗り海となりて、大船も出入出入てひかしは山につゝきたる陸地なりしか、中頃山よりほらの貝ちひたゝしくぬけ出て海へ入ける、其跡かくの如く海となりて、今切と名付るよし古老云つたへたり、我國は伊弉諾伊弉冊の産給へ、大己貴少名彦名のつくられけるといへは其むかしいかゝ侍りけん、もろこしの華山を巨靈か擘開して水をやりける事も侍るにや

◎舞坂

光行記曰、舞坂のはらと云所にきにけり、北南はへらゝとしてはるか、西は海の渚近し、錦花繡草のたくひはいとも見へす、白き砂のみ有て雪のつもれる

に似たり、其間松たえゝ生わたりて、鹽風梢におとつれ又あやしの草の庵所々に見ゆる、漁人釣客などのすみかにやあるらん、末遠き野原なれば、つくゝとなかめゆく程に、うちつれたる旅人かたるを聞は、いつの頃よりかはしらす、当原に木像の観音おはします御堂など朽あれにけるにや、かりそめなる草の庵のうち、に雨露たまらす年月を送る程に、一とせのそむ事有て鎌倉へ下る筑紫人有けり、此観音の御前に参りたりけるか、若此本意とけて古郷へむかはし御堂を造るへきよし心の中に申置たりける、鎌倉にてのそむ事かなひけるに、より、御堂を造りけるより人多く参りなんとそいふなる、聞あへす其御堂へ参りたれば、不斷香のほひ風にさそひてうちかほり、あかの花の露もあさやかなり、願書とおほしき物戸帳のひもに結ひ付たれば、弘誓の深き事海の如しといへるたのもしくおほへて。

○たのもしないり江に立るみをつくし

深きしるしの有とさくに

◎音羽松

〔海道の南小澤渡村にあり、古松にして地上にたれ又砂に這立延て風流の名木也、野口村のさいんさの松を兄とし、ここを弟として乙松ともいふ。〕

◎引馬野 濱松のほとり三方か原の舊名なり、城を引馬城といふ。

十六日記云、こよひひくまの宿といふ所にとまると、此所の大かたの名は濱松といひしたしと云しはかりの人になともすむ所なり、すみこし人のおもかけもさま／＼思ひ出られて、又めぐりあひてみつる命の程も返す／＼あわれなり。

○濱松のかはらぬ色をたつねきて

みし人なみにむかしをそ思ふ

足利義教將軍富士記行云、長月六日斗り橋本を立て引馬の宿になりぬ、引馬野は三河の國とこそ思ひ待るに、遠江にはへるはいかなる事にそ、あしの程野わけはへりし虫の音しけし。

○あかなくにわけこそきつれ虫の音の

袖を引馬の野邊の朝つゆ

義教卿

◎三方ヶ原 濱松より乾の方壹里にあり

◎颯々松 野口村の田圃の中に有り、一株をいへるにはあらず三十本餘生る松林也

◎天龍川

光行記行云、天龍と名付たるわたりあり、川深く流れおそろしくそ見ゆる、秋の水みなきり來りて船の去事速なれば、往還の人たやすく向ひの岸に着かたし、此川のみくへとなるたくひ多かりとこそ、かの巫峽の水の流れ思ひよせられていとあやうき心地すれ、しかはあれとも思ふにもたとふべき方なきは、世にふる道のけはしき習ひなり。

○此川の早き流れも世の中の

人の心のたくひとそ見る

◎池田宿

重衡海道下り云、濱名の橋をわたり給ひは、松の梢に風さへて入江に噪く波の音、さらても旅はうきものに、心をつくす夕ま暮池田の宿にも着玉ひぬ、かの宿の長者熊野か女侍従の許に其夜は三位宿せられたり、侍従三位中將殿を見奉りて、日頃は傳へたる思召寄給はぬ人のけふはかゝる所へ入らせ給ふ事不思議さよとて一首の歌を奉る。

○旅のそらはにふの小屋のいふせきに

古里いかに戀しかるらん

熊野侍従

○古里は戀しくもなし旅のそら

都も終のすみかならねは

三位中將

やゝ有りて中將梶原を召て、扱も只今の歌のぬしはいかなる者そやさしくも仕たるものかなと宣へは、景時畏て申けるは、君はいまたしろしめし候すや、あれこそ八島大臣殿の未だ當國の守にて渡らせ玉へし時めされまいらせて御寵愛候へしに、老母古里にて痛はりあれば都より御暇を申上しかとも給らされは、頃は彌生の始めにや有けん、

○いかにせん都の春もおしけれと

なれし吾妻の花やちるらん

といふ名歌仕り暇を給はりてまかりくたり候ひし海道一の美人とそ申ける、都を出て日數へぬれば彌生の半過て春も既に暮なんとする遠山の花は残の雪かと思へて浦々島々霞わたり、越方行末の事とも思ひつゝけたまふも、こはいかなる宿業のうたてさよと宣ふて、つさせぬものはなみたなり。

◎熊野侍従古跡

池田の宿、摘山行奥寺といふ寺、熊野か古跡なり。

されは池田の長といへるは今の本陣の宿の如し、仁安の頃此長者子なきをなけきて、熊野權現へ詣し祈りければ、一女子を設ふく、其名を熊野と名付三五の年にもなりしかは、其風俗窈窕として雲髻花顔一生千金の俤も、今はむかしとなりて鬼火さよしくれに青く枯體朝あらしにされて秋草の墓畔にしける、一とせ遊行他阿上人眞教國めぐりの時こゝに泊り、熊野か菩提をとむらひ、藤澤流の寺とし是を池田道場とよふものならん。

◎今の浦

見付臺の南をいふ

光行記行云、今の浦に着す、爰に宿かりて一日二日とまりたる程に、海士の小舟に掉さしつゝ浦の有さま見めくれは、鹽海の間よりすすさき遠くへたたりて、南には柳浦の波袖をうるほし、長松の風心をいたましむ、名残多かりし橋本の宿にそ似たる、きのふのそめそへりなからすは是も心とまらすしもあらざるましなと覺へて

○浪の音も松のあらしも今の浦に

きのふの里の名残をそさく

◎佐夜中山 日坂東北の方也

光行記行云、佐夜中山は古今集の歌によこをりふせるとよまれたれば、名高き名所とは聞あきたれとも、見るにいよ／＼心ほそし、北は深山にて松杉あらしはけしく、南は野山にて秋の花つゆしけし、谷より峯にうつる白雲に分入こちして鹿音なみたを催し虫の音あはれ深し。

○ふみまよふ峯のかけ橋とたへして

雲に跡とふ佐夜の中山

貞應海道記云、佐夜中山にかゝり此山口をしはらく登れば、左に深谷右も深谷、一峯なかきみちは塘のうへに似たり、兩谷の梢を眼下に見て、群鳥のさへつるを足の下に聞、谷の兩片は高く、又山の間を過れば中山とは見へたり、山はむかしの九折の道ふるさか如し、梢はあらたなるこすゑ千條のみとり皆あさし、此所は其名聞つる所なれば、一時の程に百たひ立とまりてうちなかめゆけは、秦蓋の雨はぬれすして耳を洗ひ商弦の風のひゝきは色あらすして身にしむ。

○わけ登る佐夜の中山くるしきも

こえて名残そくるしかりける

◎菊川 菊川村にあり

承久記云、承久三年八月中御門中納言宗行は小山新左衛門尉具し奉りて下りけるか、遠江の菊川の宿に着給ふ、此所をは何そと問ひ給へは、菊川と申し、則前に流るゝかさん候と申ければ、硯乞出て宿の柱に書付給ふ。

昔南陽縣之菊水汲下流

延齡

今東海道之菊川宿西岸

亡命

光行記云、菊川と云所あり、去にし承久三年の秋の頃、中御門中納言宗行と聞へし人、罪有りて吾妻へ下られけるに、此宿に泊りたりけるか、昔は南陽縣の菊の水下流を汲んで齡をのふ、今は東海道の菊川の西に宿して命を失ふとある家の障子にかゝれたりけると聞置たれば、哀れにて其家を尋るに、火のために焼

てかの言のほも残らぬよし申者あり、今はの形見として残し置けん形見さへ跡なくなりけるこそはかなき世のならひといと、哀れにかなしけれ。

○書つくる形見も今はなかりけり

あとは千とせとたれかいひけん

貞應海道記云、胡馬ひつめつかれて、日鳥つはさつかりぬれば、革命をやしなはんかため菊川の宿にとまりぬ、ある家のはしらに故中納言宗行卿かく書付られたり、かの南陽縣の菊水 downstream を汲て齡ひをのへ、東海道の菊川西岸にやとりて命を全くせん事をことに哀れとこそおほゆれ、其身は累葉の賢枝に生れ、其官は黄門の高き階に昇る、雲の上の月の前には冠の光りを交て、仙洞の花の下には錦の袖の色をあらそふ身たり、榮分之餘りて時と花と匂ひしかは人それをかさして近きもしたかひ遠きもなひきしも、かゝる浮め見んとは淺ましや、去る承久三年中旬天下風荒て海内の浪さへかへりき、鬪亂の亂將は花城よりみたれ、合戦の戦士は○國より戦ふ、暴雷雲をひゝかして、日月光りをおほはれ、軍○地をうこかして弓劔威をふるふ。

○心あれはさそな哀れと水くきの

あとかきわくる宿の旅人

◎宇津山

夫宇津山葛細道は、勢語に出ていにしへより其名高く古詠多し、上方よりこゝに至るには、岡部の驛より海道壹里斗り行て湯屋坂の下と云所あり、こゝの鼻取地藏堂の向ふなる熊野権現の社の側より右の方へ入るなり、是より道細くいさゝめなる谷川あり、此流れを右に添左につれて砥の橋五つ六つをわたる坂路にかゝれば、いよゝ道細く山深ふして幽寂たり、芽すゝき荻篠竹生茂りて藤蔓蘿かつら足にまとひ、薔薇荆棘にたもとを閉て歩しかたく、二人の手引の者鎌をもて叢をかりて次第に登るに、路峨しく杖を力に行に少しいらなる所あり、こゝを神社平といふ、むかし社有し古跡なりと教ゆ、按するに駿河風土記に宇津の谷本原神社は仁徳天皇紀七年乙卯祭る所なりと云云、若此神社の古跡ならんか古歌に

○をとに聞宇津の社のうつゝにも

夢にも見へぬ人の戀しさ

其上の方に猫石といふ有り、古松六七株の陰に猫の臥たる形に似たる巨巖あり、夫より又登るに漸頂嶺とおほしき所に出たり、山廓依々として伐木の音さへかすかにたも聞へす、實に陶潜か桃花源に至るの俤あり、是より東に下る坂路いよ／＼、驟しく、且眞砂地にして踏止かたくすへりなやみて靜かに下る、少しき道ある所へ出れば又溪川あり、こゝにも缸の橋あり、路も鮮にして段々下るに、遂に宇津の谷嶺の東なる十團子の名物の茶店の傍たいら橋といふ圮橋の東爪に出たり、是東海道なり、初の湯屋口より此所迄道法一里にたらず是を鳶の細道といふ。

貞應海道記云、岡部の里を過てはるかにゆけは、宇津の山にかゝる、此山は山中に山を愛する巧のけつりなせる山なり、碧岸下に砂なからして巖をたて、翠嶺の上に葉落て壤をつく、肱を背に面を胸にいたきて漸に登れば、汗肩祖の膚に流れて單衣かさぬといへとも懐中の扇を動かして微風の扶持可なり、斯くて森々たる林をわけて峨々たる峯を越れば、〇〇のほまれは此山に高し、大かた

をちこちの木立に心みたれて過れば朝雲峯くらし、虎李將軍か栖を去り草風谷寒し、鶴鄭大尉か跡にすむ、既にして赤羽西に飛眼に遮るものとは檜原嶺の葉老のちからこゝに疲れたり、足にまかするものはこけの岩根、勤の下道嶮難にたへす、しはらくうち休めて修行者一兩客繩床そはたてゝ休む。

○立かへり宇津の山ふしことつてよ

都こひつゝひとりこへきと

行く／＼思ひはすきぬる此間の山河は、夢に見つるかうつゝに見つるか、さのふとやいはんけふとやいはん、むかしを今と思ひは我身老たり、今をむかしと思ひは我心わかし、古今をへたつるものは我心の中懐なり、生死涅槃猶如昨夢といへるも哀れとこそおほゆれ、さのふ過にし跡はけふの夢となり、今日此處を過る明日いつれの處にして、今は昨日といはん、誠には是過ぬるかたの歲月を夢より夢にうつりぬ、昨日今日の山路は雲より雲にゐる。

○あすや又きのふの雲にとろかん

けふはうつゝの宇津の山こゑ

◎梶原景時墳 狐崎の東岩原の左の方梶原山にあり

光行記行、云うち過る程にある木蔭に石を高く積上て目にたつさまなる塚あり、人に尋れば梶原か墓となん答ふ、道のかたはらの土となりにけりと見ゆるにも顯基中納言の口すさみ給へりけん、年々に春の草老たりといへる詩思ひ出られて、是又古き塚となりなは名たにも残らしと哀れなり、○大傳かあとにはあらねと、心有人はこゝにも泪をや落すらん、かの梶原は將軍二代の國にほこり、武勇三略の名を得たり、側に人なくそ見へけるか、いかなる事にか有けん、かたへのいさとほり深くして忽に身を亡すへきになりければ、ひと問とも延んとや思ひけん、都の方へはせ登りける程に、駿河國告川と云ふ所にて討れにけりと聞しかば、さはこゝに有けりと哀れに思ひ合されける、讚岐法皇廢所へ趣かせ給ひて白峰といふ處にて崩しさせまし、ける御跡を西行修行のついでに見まいらせて。

○よしや君むかしの玉の床とても

かゝらん後は何にかはせん

とよめりけるなと承るに、まして下さまのものゝ事は申すに及はねとも、さしあたりて見るにはいとあはれに覺ゆ。

○哀れにも空にうかれし玉鉾の

道の邊にしも名をとゝめけり

◎清見關 村老曰、清見寺の門前也と

貞應海道記、清見か關を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまとはし、東北は山と磯と嶮難同しく、是をつまたつ磐の下には波の花風にひらく春の定めなく、峰の上には松の色みとりをふくみ秋をおそれず、滔天の浪は雲を汀にて月のみふね夜出て漕沈め、陸の磯は磐を道にて風の狭脚あしたに吹てすく名を得たる所必しも興を得ず、耳に沈る所必しも目にふけらす、耳目の感二つなから得るは此浦に有り、浪に洗ひてぬれ、道をとひは、松風むなしくこたふ、柳岸にくるしみを尋ねて、槿花變して石あり、關屋の邊に布たゝみと云所あり、むかし關寺の布を取たるか積りて石にふりたりと聞ゆ。

○吹よせよ清見うら風わすれ貝

ひろふ名残のなにしおはしや

◎興津川

十六夜日記、興津の濱に打出つなくく、跡の月かけなとまつ思ひ出らる、ひる立入たるところにあやしの御けの枕ありいとくるしければうちふしたるに硯と見ゆれば枕の障子にふしなからかきつけつ、

○なをさりにみるめはかりをかり枕

むすひおきつと人にかたるな

◎岫崎 興津川をわたりて薩陞山の海岸をいふ

貞應海道記、岫崎と云所は、風飄々とひるかへりて砂をまはし波浪々とみたれて人をしきる行客こゝにたつさはりてしはらくよせ引浪間をうかかひて急き通る、左りは嶮岩の下に岩のはさまをしのきゆく、右は幽なる浪のうへをのそめは眼うけぬへし、はるくくとゆく程に大和田浦にきたりて小舟の沖中にたよひるを見る、飄帆飛て萬里風便をたのみて白煙に入鼈波うこきて千雲夕陽をあらひて○藍にそむ、海館のうち此所をのみとめて身をはととめす。

○わすれしの波の面影立そひて

すくる名残の大和田のうら

◎富士川

貞應海道記、蒲原を立てはるかに行は前路に先たつ賓は馬に水かひ後河にさかりぬ、行程にさかりくるおのれは野に草しきてこぬ人をさきにやる、先後のあはれは行旅の習にも思ひしられて打すくる程に富士川をわたりぬ、此河中にてそ石を流す巫峽の水のみなんそ舟をくつかへさんや、人の心は此水よりもさかしければ、老馬をたのみて打渡る、老馬く、汝は智有りければ山路の雪のみにあらず、川の底の水の心もよく知りけり。

○音に聞し名高き山のわたりとて

底さへ深し富士川の水

◎曾我兄弟禿倉 富士川の東○○の左りの山際○○と云ふ所にあり

去人曾我八幡といふ、今も敵討の者信するに靈應ありといふ、其側久津と云所に泉福寺といふ寺あり、曾我兄弟の石塔あり、苔深く文字剝落して見へず、寺に

牌あり十郎祐成を高崇院殿峯巖良雪といひ、五郎時致を鷹岳院殿士山良富と見へたり。

◎富士山

夫富士を芙蓉と名付る事は、八ツの峯八ツの谷ありて其體は八葉の蓮花に似たり、不二（？）は都氏の宣ふ郡の名によりてなり、山は〇にして萬物を生る謂なり、麓は駿甲相の三國に跨りて、嶺は十五州の壯觀とて青天忽見素羅笠羅笠擔中十五列と惶窩先生も詠し玉ひ、又石川丈山も雪如紈素煙如炳白扇倒懸東海天とも賦し京師の四明大和の金峯よりも見ゆる、尙も肥の崎陽より百里斗り漕出て大洋より富士峰見へて、外夷の船我國へ渡海の的とすとそ聞ゆ、むかし孝安帝九十二年此山始て現すとも又孝靈帝五年近州琵琶湖と共に一夜に現すとも云つたへり、或説には大むかし此山雲霧深くしていまた現れず、人民も少くして尋〇とる事なし、孝靈の御時初めて霧はれ見顯しけるとそ、是らも都氏の記にみへされは正説にあらず、本朝の高嶺にして絶頂まで九里餘直立の高さを積れば都て一千五百丈にして北斗に近し、峰の形貌妙にして業平も鹽

尻に似たりと云ひ、夏天に雪を戴て萬葉に詠す、巖は平原にして其中を呵澤とて凹にして甑の如し、底に池あり今は水涸れてなし、虎石とて虎の躰に似たる石あり、こゝにては夜陰に旭をかゝやかし、日の出には三尊佛を期すとかや、はるかに東北を見下せば、海面幽にして鳥嶼浪にふす鷗のことし、西南は雲霧朦朧として水やそらとも見へわかす、山路は三ツの街ありて是より登り千筋にわかる、裾野は長くして百里につらなる、尾の富士見原遠の鹽見坂まては山の形相同し三穗清見神原よりは良に當りて嵯峨たり、原吉原は正面にして裾野まて鮮かにして、山趾東西に長し、三島箱根よりは伏龍の形に見へて鎌倉よりは北の方へ甚延たり、武藏野よりは西南にあたりて江府の赤坂駿河臺よりは乗物の窓に眸を動かし、日本兩國の橋上には馬上の人の首をめくらし駿河町の名も富士に寄なり、延喜式内淺間の神社は此山の神にして、木花開耶姬を祀る、此命は大山祇の御女にして瓊々杵の皇妃木花とは櫻樹に天降り給ふにより、富士に櫻を詠する事此縁なり、三島は大山祇の命なれば云俗御親子とも云なるへし、水無月の禪定は松明を照せる事幾千萬といふ數をしらす、眞砂は詣

人の裾に就て下れば其夜又峰へ登る其音瀧水の如しとて峰に鳴澤の名あり、是は里人いふ富士の御神砂をおしみ玉ふとそ竹取物語には竹取の翁といふ者ありて竹を取に行ける時其竹の中に三寸斗りの人ありいと美しければ養ひ育たるに、誓の間に生長し艶顔なること限りなし、屋の内は光り満々たれば名をかくや姫といふ、風土記には是を鶯姫と稱し、今昔物語にも見へ、詞林採業にも天智天皇かくや姫を戀したまひ、勅使を遣はされければ、不死の薬を献り、天上し玉へける、此ゆへに薬を煙となし富士の名けむりの立登る事こゝに起るとなり、天智帝は京師御廟〇より昇天し玉ふとて御杵の止る所に御陵を築て陵村の名今にあり日本記には大津の宮にて崩し玉ふとあり、或人の曰、實は天皇巡視し玉ふ時薩摩瀉鹿兒島のほとりにて崩し玉ふ、今も御陵の其地に有りと其人の語りきと告るこれ秘藏の事になん、桓武帝陵は京師深草柏原にあり、一千年に逮ふといへとも其所顯然たり故に柏原天皇とも申奉りき、源の順の竹取物語を書れしは莊子に、効て寓言なり(?)難波の契沖阿闍梨は寶樓閣經によりて著されしと宣ひしなり、古雅の名文にして歌道の標となる、赤人は白

妙に譽を取り、俊成卿はなる〇にあた名を殘し、西行法師は五文字を〇か禰、頼朝卿は捲狩に武將の威を耀し、曾我兄弟は俱に天を載さるとて本意を達し、常陸坊は仙境に入仁田忠常は人穴に名高く、役の小角は木履にて歩み上宮大子は驪の駒を馳せ、空海圓珍も登山して石佛を鑄し、除福は秦帝を嘶てこゝに來り、絶頂の〇半腹の雀富士松の紅葉不二〇草ふじ、黄底ふじ、海苔富士の八湖は倒に影を浸し、甲州の府には三ツの嶺に見へて古法眼の霞の富士はこゝなるへし、むかしの東海道は富士愛鷹ふたつの山の間を通り、其中に横走關と云あり、愛鷹清見横走是を富士の三關と云、むかしの道を旅人しけく通り、重服觸穢もあれは愛鷹明神深くいとはせ玉ひ、南海の中にゆられて有ける、嶋を打よせさせ玉ふて今の海道は出來にけり、其寄せられし嶋は浮島か原とて云傳へ待る、抑三國無双の名山と賞し、魏楚六朝及び宗學士か日本曲にも〇蓬萊山と號する所紀の熊野尾の熱田此山なるへし、それか中にも是上にして眞に我國の仙境梅福九華眞妃も出さるはうらみ多き事なるへし。

◎富士沼

吉原の北にあり

光行記行、浮島か原はいつくよりもまさりて見ゆ、北は富士の麓にてみとりか
 けをひたして、空も水もひとつなり、芦かり小舟所々に棹さしてむれたる鳥お
 ほく去り來り、南は海の面遠く見わたされて雲の波煙の浪いとふかき脈なり、
 すへて孤島のみなこに遮るなし、終に遠帆のそらにつらなるを見る、こなたか
 なたの眺望いつれもとりくりに心ほそく、はらには鹽屋のけむり絶え絶え立
 わたりて、補風松の梢にむせふ、此原むかしは、海の上にかかひて蓬萊の三ツの
 嶋の如くに有けるによつて浮島となん名付けたりと聞にもおのつから神佛
 のすみかにもやあらんといとゆかしく見ゆ。

○影うつす波の入江のふしの根の
 けむりとそらに浮島かはら

○手兒呼坂 元吉原四ツ屋にあり

○要石 一本松村の海邊にあり、海濱の風景妙にして伊豆の岬まで見へわたりて、〇〇天を浮むの勝境なり。

○原 委は浮島原なるへし原、吉原、蒲原を三原といふ

貞應海道記云、うき嶋か原を過れば、名は浮島と聞ゆれとまことは海中とは見

へす、野經と見つへし、草むらかり木の林あり、遙に過れば人煙片々とたへて又
 たつ新樹程をへたつ、隣たかひに疎し、東行西行の客は見る知音にあらず、村南
 村北の道にたゞ山海を見る。

○横走關 富士足柄の間にあり古への東海道なり

○富士人穴 足柄山の麓なり建仁三年六月三日仁田四郎忠常人穴に入りしこと人口に膾炙す。

○千本松原 沼津の驛の南五反田村の海濱の松原をいふこゝに六代御前の石塔あり

光行記行、千本松原と云あり、海のなきさ遠からず、松はるかに生わたりてみと
 りのかけきはもなし、沖に舟とも行ちかひて、木の葉のうけるやうに見ゆ、かの
 千株の松のもとの双峰の寺、一葉の舟の中の萬里の身を作れるに、かれもこれ
 もはつれず、眺望いつくにも勝たり。

○見わたせは千もとの松のすえ遠く
 みとりにつゝく浪のうへか那

○車返シ 沼津三枚橋の北の地名也

貞應記行、車返しと云所を過ぎ此所もし蟻垤か道にあたりて、行人をとめける

か又もし遊兒か土城を作りて孔子に答けるか、若又勝母の閭ならば曾子にあらずとも淮もいかゝ通らん、嶮岨の地なれば大行路と云つへし。

○むかし誰こゝに車のわつらひて

なかへを北にかけはしめけん

◎富士隠れ

〔沼津の東黒瀬松原二ツ屋など地形大に低し愛鷹山にさへきられて富士見えず。〕

◎頼朝義經初對面地

黄瀬川の東長澤(?)村八幡宮の社地也

◎伊豆三嶋神社

三島驛中にあり

光行記行伊豆の國府に至りぬれば、三島の社のみしめうち拜み奉るに、松のあらしくらく、音つれて庭のけしきも神さひわたり、この社は伊豫國三島の大明神をうつし奉ると聞にも、能因入道伊豫守實綱か命によりて、歌よみて奉りけるに、炎旱の天より雨暴にふりてかれたる稲葉も忽ちにみとりにかへりける、あら人神の御なこりなれば、ゆふたすきかけまくもかしこくおほゆ。

○せきかけし苗代水のなかれきて

又あまくたる神そ氏かみ

◎箱根

寂連集、十月はかりに東の方にまかりけるに、箱根といふ山をなん越ける、所の有様あやしくよの常にかはりけり、遙かに峯に登りては海をわたり、谷に下りては雲をふむ、去程に風に木の葉をまくりあけてしくれの麓より登りければ

○旅のそら雲ふむ峯を越ゆるらん

しくれば袖の下よりそする

光行記行、猶過る程に、筥はかりなる山の中に至りて、水うみひろくたゝへり、箱根の湖水と名つく、又あしの海と云もあり、權現垂跡のもとひけたかくたふとし、朱樓紫殿雲にかさなれるよそほひ唐宗の驪山宮かとおとろかれ、岩寶石龕の浪にのそめる、かけ錢塘の水心寺とも云つへし、嬉しき便りなれば、浮身のゆくへしるへをせさせ玉ひなと祈りて法施奉るつゐてに。

○今よりは思ひみたれし芦の海の

ふかきめくみを神にまかせて

◎金湯山早雲寺

湯本村にあり北條五代の墳寺内にあり

◎石橋山 小田原の入口より壹里斗西南に有り海面遡々として風光いちしるし

◎小餘綾磯 コヨロギノイソ 酒匂より大磯迄の磯邊をいふ

◎鳴立澤

◎花水橋 高麗寺村にあり此邊風景よろし

◎馬入川 馬入村にあり

◎雨降山大山寺 京師よりは小田原より入る、江戸よりは藤澤の西四ツ谷より西に入る

◎兒か淵 江の島龍窟へ下る岸下にあり

相傳ふむかし建長寺廣徳庵に自休といふ沙門あり、奥州信夫の人なり、或時宿願ありて江の島に詣す、此山中にして美少年に逢ふ、藏主戀慕の思ひ止かたくや有けん、かの伴ふ僕に問へは、鎌倉の相承院に住玉ふ白菊といふ兒なりと答ふ、夫より人を以てひそかに、思ひのまゝを文に書て求むれとも更に諾する色なし、然れとも日に増して思の闇ふかく、いろ／＼と品をかへて云おくれとも随ふけしき見へす、月を累ねて切に聞へければ、白菊情あるものにや有けん、ある夜まされ出て江の島に行き、扇をわたし守にあたへて云やう、我等を尋る人

あらは見せよと云て別れぬ、其扇に歌あり。

○白菊にしのみ、の里の人とはし

思ひ入江の嶋とこたへよ

○うき事を思ひ入江の嶋かけに

すつる命はなみの下草

かく二首の辭世して、此淵に身をしつめて終りけり、自休慕ひ來りて此歌を見
て思ひにむせひ一律を賦す

懸崖峻處捨生涯チ

十有餘霜在刹那ニ

花質紅顏碎岩石ニ

娥眉翠黛接塵沙ニ

衣襟只濕千行淚ニ

扇子空留二首歌ニ

相對無言愁思切ニ

暮鐘爲誰促歸家チ

○白菊の花のなさけの深き海に

ともに入江の島そうれしき

是らを詠して此淵に共に投死したり、故に兒か淵といふ、白菊ヶ塚は鎌倉にあり、自休の像は同西御門法花堂にあり。

○七里濱 腰越より稻村崎迄渚道四十二町東關六丁一里を以て七里濱といふ

○鎌倉 鎌倉田境東は六浦西は稻村南は小坪北は山ノ内とす、其中に谷七〇十井十橋七の切通五水の名泉あり

○能見堂 金澤稱名寺の西北にあり、擲筆山地藏院と號す

○捨筆松 堂前にあり

諺曰、むかし巨勢金岡此地に來りて、こゝの風景を寫さんとして、筆を取りしに眞妙の美心のまゝならんとて此松の下にて筆を投捨しとなり、此堂上より風色の妙なる限なく見ゆるゆへ能見堂の名あり。

附 録

○加田粟島大明神アスカ天兒アメノミコの由來

今の世に、例年三月三日、九月九日、女子雛祭の遊戯ある事は往古神功皇后手つから少彦名命の御神像を作りて當社に奉納なし給ひしより起れり、其後仁徳天皇の御宇神託によつて、天下婦女の病苦を攘除のため、宇禮ウレ豆マメ玖ク物モノとて雛形を製して是を翫はしめ玉へり、又天兒といへるも少彦名の御神像にして、是をまつる事雛遊の卷に見へたり

○あまかつの教そめにし神こゝろ

あはれとは見よおなし子のため

以上社家の秘説なり。

又或説に少彦名命は、神代より醫藥の祖神にして、禁厭マヒナヒ轉移の法を傳へ給ひり、其法多くは病腦災難すへて轉しうつして免れしむる術なり、こゝを以て文徳實録に、天安元年八月在常陸國大洗齋酒列碌萬神○官社云々同年十月此二

神號藥師菩薩名神と延喜式神名帳にも出て名神大とあり、此神は則ち大汝命少彥名命二神にてまします、されは命命綱といへるも彼みことの御教にて繩をなひてさま／＼にま〇なふ法なるを後世あやまりて幻術家と混せり、今の世に人の風ほろしを患るに、左り繩にてこすり其繩を火にもやせは、ばち／＼となりて風疹癒るなり、是則ち命繩の遺法なりといふ、其ことくにて彼天兒といへるもすへて己れか身にある災を彼に轉しうつすのまちなひにして、あらたに製して身に着る程の物は、皆先天兒にかつけて是をさせ其餘座右に置いて、心よからさる事のある時は、天兒を撫さすりて是をうつしまちなふなり、諸禮家の傳に、婚禮親迎の夜先乗とて副輿に此天兒をのせて新婦の前に行かしむ、もろ／＼災あらんには、彼に負はするの心なり、されは天子御祈願の事ありて諸社に奉納し玉へるヲナテモノといへるも、此天兒の事なれば、其むかし皇后御不豫の事ありて、此御神へ祈請なし玉ふとき治め玉へる天兒なるへし、夫を後世ひなとなして兒女のもてあそひとするも此遺言によるなるへし、唐にも歳時記に化生の事出たり、其もと／＼は女兒のもてあそひものなるを、後には泰山の神にさつけまつりしやう五雜俎に見へたれば、後世其もとを忘るゝ事、和漢往々おなじかるへし。

丙午紀行附録

(東海道名所古跡略記)

終

その一

丙午紀行の終りに

丙午紀行二卷竝に附録一卷は、予が王父桃園先生の著書の一つとして家に藏するところなり、頃者事を以て、これを剞劂上梓し、乃祖の祭祀に於て、舊門有志に頒呈することとなりぬ。書肆清水書店主葉多野君、多年予と親交あり、同君の業は、主として法律書の刊行にあれども、特に予が行を賛して、之れが出版をうけがわれたり、而かも予當初の考としては、當然これを非賣品たらしむる積りなりしに、同君は讀むく、當時の世態現時に對して、餘りに珍らしければ一部分公刊してはとの勸説をうけぬ、現代には全く沒交渉のものにして、而かも著者その人は、何等之等の後圖なしに書きつらねたる平明觀察の一記述に過ぎざれば、之を公刊せんも烏滸がましく、又無益なるべきこととして辭退したれども、同好の士もあるべし、一部爾かしてはとのことより、意を決して半ば公刊のこととなせるなり。唯だ予として面白く感ずるは、卷頭掲げたる今を距る百有餘年前の驛傳地圖なり、こは予が先年廣島在任の折市井に於て偶然發見し

たるものなり、先輩にして畏友たる吉野法學博士の配慮によつて、斯界の泰斗たる山崎理學博士の題言を得るに至り、更に又這般黑板文學博士の題叙を得るに至りしは、この地圖に對して無限の光榮を附するのみならず、著者が廣島にその足跡を印したりしことを偲び、又或は當時この種地圖を携帯して遊歴せしにはあらざりしかを追懷して、感興特に深きを覺ゆるなり。

表箋文字及び卷頭題圖は、共に彼の有名なる古籀篇一百卷の大成によりて、帝國學士院賞を受けたる、鴻儒竹山高田忠周先生の筆に爲れるもの、葉多野君の出版に關する配慮と共に、併せて深く感謝せざるべからざるなり。若しそれ書中往々にして○字を以て埋め、文章前後の照應を缺くは、此書數十年篋底に藏して紙蟲の害をうけ、文字の讀過明瞭ならざりしに因る、その他著者の引證俚俗に陥り、不正確のところ多からん、而かも本書の目的は、別に史的考證の適確を期したるにあらずして、唯著者見聞の叙情にあり、讀者深くこれを咎められざらんことを、又而して校者の閲訂、俗身常に匆忙寸暇なき時に於て、半夜の一燈に、僅かの間を偷みてこれを試みたり、豈に多く魯魚の誤りとのみ云はんや、

刷成隨所の過誤は切に大方の寛恕を仰ぐと爾云。

大正壬戌十一年春三月

東京目白臺の僑居に於て

校者謹識

その二

丙午紀行の終りに

王父桃園先生逝いて早や爰に二十有五年、而して其行實の記録と共に、祖君の咏草三首丈大の石に鐫せられて郷里亘理の公園にあり、これ實に郷閭舊門の諸彦が協心戮力して建て給ふところのものなり、而かも祖君米壽の賀筵に於て親しくこれを諸彦に謝する企なりしに、筵を開くの数日前俄かに病んで此世を去り給ひ、遂に其事を果し得ざりしは、予双親と共に語りて、常に千秋の恨事となせるところなりき。予弱少筴を負ふて東都に學び、時に歸省してこの祖君の記念碑を俯仰する毎に、乃祖の遺徳を欽仰すると同時に亦舊門諸彦の誼に厚きを感謝せざる時とはなし、崎嶇たる人生の行路難に對して、幸に予が今日まで、差して大過もなく辿り來れるは、實に祖君の遺徳と舊門厚誼の感銘に因る刺激鞭撻によれる資ならずんばあらざるなり。予曩年舊門に在るの日よりいつかは適當の時機を得て、何等かの企圖によりて、親しく、この碑前に於て、謝思の意を披瀝したしとの念願は、一日として己が臍裡より去りたることなし、況んや今世相幾變遷、わが父母亦既にみまかり給ひ、

郷閭の舊門寥々指を屈するに過ぎざるに於てをや、冥々の裡、特に思慕を先人在世の昔に馳すれば、その風貌座臥の事共、まざくわが追憶に顯はれて、その遺徳を偲ぶこと殊更に深し。

丙午紀行二刊及び附録一卷は、祖君の他の幾何の著書と共に、わが家に傳はれるものなり、丙午紀行は、實に今を距る七十有六年前、わが桃園先生が同藩三士と共に、本藩則ち仙臺より遠く藝州藩までの徒歩往復旅行實記にして、經歷三十四國百五十郡府城總計四十六所に互れる遊歴記述たり。而して特に諸藩政經の觀察を避け、單に之を一片の遊歴叙記に止めたるは、祖君の意ありてのことなるか如何は、暫くその詮議立を爲さて、行文平坦通讀別に快興を覺ゆるものなしとするも、亦以て當時遊歴者の着眼は、果してこれを奈邊に置きたりしやも洞察に難からず、而かも、今より七十有餘年前の當時を辿りて、これを現時と比較せば、世態事相の變遷は、眞に驚嘆に堪へざるものあり。顧ふに故きを温れて新らしきを知るてふことは、又吾人の常に期せざるべからざる所にして、此意味に於て、此書の上梓舊門緣故への頒呈が祖君碑前の祭祀とによりて、嫡孫としての予の年來の感謝宿願の表示として、又以て無用の企にはあらざるべし。

而して、更に茲に叙し置きたきは、卷頭の本邦古地圖のことなり、この繪圖は、予が廣島在任中に於て、偶然市井に於て發見したるもの、恰かもよし、祖君丙午紀行に附して、相應はしきものなりとの念慮より、裝禎して座右に置きたるが、會々先輩にして畏友たる吉野法學博士が事を以て廣島に來り、會晤して談之れに及び、持ち歸られて、山崎理學博士並びに吉野博士の題言を得るに至りしなり、次で這般又黑板文學博士の題叙を得るに至りしは、この地圖にとり、又祖君の丙午紀行にとりて、蓋し此の上もなき光榮にして、これ或は當時祖君がこの種地圖を座右にして、遊歴せられしにはあらざりしかとも思ひ偲ばれて、しかも之を廣島の地に於て獲たる如きは、祖君の手澤尙存するが如くにして、感興殊更に其の深きを覺ゆるなり。

更に、表箋、丙午紀行の古隸及び卷頭題圖は、彼の有名なる古籍篇壹百卷の大戚に因り、帝國學士院賞を受けたる碩儒竹山高田忠周先生の厚意に成れるもの、又而して、この書出版に付ては、予が東京帝國大學在學當時より、親交を訂し來れる法律專門書肆清水書店主葉多野太兵衛君が、彼の同じく深誼當ならざりし法學博士高橋作衛氏が、先考白山先生のために、白山詩集を刊行せられし事例に倣ふて、特に予がために、その専門外の刊行に深甚なる厚意を寄せられて成れるもの、予は偏に竹山先生並に葉多野君に對して、此の書の出版に付ての同情と配慮とに付て

茲に深厚なる感謝の誠意を表すと爾云。

大正壬戌十一年春壬三月

東京目白臺の儒居に於て

佐藤密謹識

本書に對する諸新聞の批評

一、丙午紀行(佐藤桃園著)

嫡孫佐藤密氏が嚴密に校訂して覆刻したもので、もとゞ知友間にのみ配付されたのを、更に増刷して江湖の士に廣く頒布すべく出版されたのである。天地人三冊より成り、天地兩卷には、著者の生國陸奥から藝州に至る紀行を收め、人の卷には附録東海道名所古跡略記が載せてある和装唐本仕立。

(大正十一年五月十五日 國民新聞)

二、丙午紀行(佐藤桃園著)

陸奥の藩士桃園佐藤脩亮氏が、今より約八十年前、陸奥を發して安藝に至りたる道中日記にして、氏の嫡孫佐藤密氏の校訂出版したるものなり、文は簡潔にして、能く當時の風俗人情を寫し、懐古の史料としても、大に珍重するに足るものあり。江湖の一讀を薦む、和装菊判全三冊

(大正十一年五月十六日 やまと新聞)

三、脩亮翁丙午紀行

本書の著者故佐藤脩亮氏は、現加島銀行東京支店支配人佐藤密氏の祖父であるが、佐藤密氏は北海道に生れ、然かも當市の寶小學校を卒業した人で、淺からざる縁故を有するのである、兩三年前にも懇々來函して、當地五島軒で當時の恩師田原駒吉氏外同窓十數名を招待して、懷舊談に時の移るを知らなかつたといふ特志家である、今回祖父の遺著を印行して舊門下及び縁故者に贈呈するつもりであつたが、書肆の懇請に依つて、實費以下の定價で一般に頒布するさうである、今同書刊行の趣旨を寄せられたのを摘記すれば。

同書三冊は祖父脩亮の著にして、小生這般之を奇厭上梓するに至りし事山の梗概は、記して卷後に載せ置き申候、元來本書の上梓舊門願呈の事は、小生曩年在巖當時よりの宿願に御座候へしも、衣食多忙の身は仲々に其事を實現致しがたく、在昔今日に至り居候、然るところ王父逝いて春秋爰に二十有五年、そゞろわが現時と乃祖在ませしその當時とを顧みて感慨寔に胸奥に逼るものあり、兒等また漸次長じて乃祖業蹟の一斑を知得せしむると同時に、故舊厚

誼を叙して之を示すは、即ち以て兄弟相信じ友に篤く、將來依つて以て家道に勵ましむるの方途なるべきを思ふと共に、先人遺徳を偲びて切磋琢磨の義に叶ふの切なるを考ひ、印行して、茲に成本謹呈するに至りし一因に外ならず候、若し夫れ此の他の諸因に至りては宜しく之を小生卷後の題叙より抽出御諒得を仰ぎ以て微意の在るところを御酌量被下度御願申上候(後略)

(大正十一年五月十六日 北海道函館毎日新聞)

四、丙午紀行(桃園佐藤脩亮著)

桃園翁遺著を、翁の嫡孫密氏が同好に頒つ目的で校訂上梓したもので、維新前奥州藝州間を往復した一種の旅日記である、維新前各藩を來往したものに、多くの見る種類のものであるが、本書は殊に地理に精しく、一風一景必ず歌を添へたところに、著者の嗜懐と時代相とが覗はれる、和装天地入三冊。

(大正十一年五月十七日 東京日日新聞)

五、丙午紀行(天地人)佐藤脩亮著

本著は陸奥の人佐藤桃園氏が故郷を後にして、東海、近畿、四國、山陽、北陸に

亘る三十四箇國を遍歴し、各地の名所舊跡を探り、山紫水明の美を謳ひ、懷舊旅情を叙したもので、一讀昔日の旅行を偲ぶと共に、篋底深く藏せられた桃園氏の文筆に親しむことが出来る。

(大正十一年五月十八日 中外商業新報)

六、丙午紀行(佐藤脩亮著)

佐藤密氏校桃園佐藤脩亮翁の旅行日記である、脩亮翁は、現加島銀行東京支店長佐藤密氏の祖父で二十五年前に逝かれた人であるから、書名の丙午が干支に相當するものなら、明治維新前約二十年の所産に係る譯である、二月十六日に郷國陸奥を出發し、日光、江戸、伊勢、奈良、和歌山を経て四國に渡り、内海の沿岸から嚴島に詣り、廣島から山陽道を上り、大阪京都を経て六月九日に歸郷して居る、經歷するところ三十四國四十六城下に亘り、一日の行程五里より十一二里、汽車なく汽船なく、意の赴くが儘に歩を停め、杖を曳く、悠々春日の長さに任せたるお上さゝん式旅行で、沿道の名所舊跡は、著者の見るが儘、感ずるが儘、想ひ出すが儘に書き列ねられて居る、當時に在ては、地理的、歴史的新材料として迎へられたものにして、違ひなからうが、今日にても一讀旅情の油然而と

湧くのみならず、當年の確の記録として、参考とする所尠くなく、紀行は天地二卷に了り、第三卷には附録として、東海道の名所古跡を載せて居る、著者は又歌人と見えて、隨所に詠みたる無数の和歌は、月次歌人の域を脱して、誠に朗誦するに足つて居る。

(大正十一年五月二十二日 廣島中國新聞)

七、丙午紀行(佐藤脩亮著佐藤密校)

故脩亮氏が在世中に來往した紀行文を三卷に分ち天地人としたもので、天の卷には自本藩至藝州を、地の卷には自藝州至本藩を、人の卷には附録として東海道名所古跡略記を載せたものであるが、諸所に三十一文字などを入れ、當時の有様もかくやと思はるゝほど、甚だ捨てがたいものがある。

(大正十一年五月二十五日 報知新聞)

八、丙午紀行(佐藤桃園著)

陸奥の儒士桃園翁の遺稿を、嫡孫に當る現加島銀行東京支店長の佐藤密氏が校訂の上、舊門知己に頒つために出版された天地人の三卷の書で、天地の二卷は日記體にして、仙臺より藝州に至る紀行と其歸

途の旅行記、人卷には東海道名所古跡略記を収め、平明な觀察によつて、叙事叙情し、幕末の風雲漸く動かんとする當年の世態が描かれ、今にして歴遊の跡をしみみくと思はしめるものがある、因に本書は書肆の勸説により一般同好者にも實費以下の定價を附して提供さるゝと云ふ。

(大正十一年五月二十八日 大阪時事新報)

九、丙午紀行(天地、人、佐藤密編)

本書は編者の祖父佐藤桃園氏の遺稿を上梓したもので、和装三冊、全部桃園氏の紀行文で、奇警なる觀察が窺はれる、特に卷頭に掲げた百餘年前の驛傳地圖は、編者が廣島で偶然発見したものだ、そうだが、珍らしいものではあり、學者の參考ともなる事であらうと思ふ。

(大正十一年五月二十九日 大阪毎日新聞)

十、丙午紀行(佐藤桃園著)

古人の文の尊きは、些の銜氣無いからである、私藏の日記旅行記に於て特にそうである、陸奥の儒士佐藤桃園氏が、遙かに陸奥より藝州に至る間の旅行記「丙午紀行」も然ういふ意味に於て尊い記録である、本

記二卷それに附録として東海道名所古跡略記一卷を添へてある、行、文、古、雅、簡、質、朴、純、の、極、に、達、し、無、限、の、滋、味、を、感、じ、得、ら、れ、る、昔、の、大、名、行、列、と、い、つ、た、も、の、旅、行、振、り、が、知、ら、れ、る、の、み、で、な、く、然、う、し、た、旅、行、に、侍、る、藩、士、の、心、持、の、知、ら、れ、る、の、も、嬉、し、い、と、思、ふ、所、謂、文、人、の、文、章、で、な、く、て、謹、直、な、侍、臣、の、氣、高、い、風、韻、が、漲、て、お、る、謂、ふ、と、こ、ろ、の、風、韻、で、あ、り、風、俗、で、あ、つ、て、斯、様、な、味、は、今、時、の、文、章、に、求、め、得、ら、れ、な、い、丙、午、紀、行、三、卷、は、現、代、に、全、く、没、交、渉、で、あ、り、何、等、の、後、圖、な、し、に、書、き、列、れ、た、平、明、觀、察、な、記、録、で、あ、ら、う、け、れ、ど、も、文、の、尊、さ、は、永、遠、に、時、代、を、超、越、す、る、記、述、の、中、の、現、時、の、世、態、に、比、し、て、珍、ら、し、い、の、時、代、を、超、越、す、る、言、ふ、ま、で、あ、ら、う、之、を、和、紙、和、装、の、天、地、人、三、卷、と、し、た、も、の、參、考、と、な、る、點、も、多、い、で、あ、る。

(大正十一年五月三十日 福岡九州日報佐世保新報)

十一、丙午紀行(佐藤密校)

校訂者の祖父に當る桃園先生の遺著三卷を印刷公刊せるもの、弘化三年二月十六日陸奥を發し、往路は東海道を、歸路は越路を経て、仙臺藩までの往復漫遊旅行の道中を日を返うて書き記したものである、

何の誇張もなく毎日の道中見聞を認めたところに、當時の驛路の有様をさながらに偲ぶことができ。

(大正十一年六月十四日 萬朝報)

十二、友人の二著(故人の丙午紀行と)と題して六月二十五日
大阪新報に松崎天民氏、東京より大阪への一節

中橋さんと元田さんが、頸を横に振つたのが因で、現内閣もたうとう總辭職と云ふ、大詰の幕に辿り着いたとかで世間も騒がしいし新聞紙上も賑やかな事である、後繼内閣が何人に大命降るともほんとの政治さへ遣つて貰へば、政友會でも憲政會でも、但しは清浦、後藤であらうと、私達は構はない。たゞ雲の徂徠にまかせてそんな事には頓着なく、本でも讀まうかと横になつて居るところへ、一封の小包が到來した。差出人は加島銀行東京支店支配人で、佐藤密君とあつて、中には和製帙入の「丙午紀行」三巻が入つて居て、別に町重な手紙が添へてある。佐藤君の祖父桃園先生が、今を去る七十六年の昔、仙臺藩の三士人とともに、遠く藝州廣島藩まで徒歩往復したところの歴遊を記述したもので、行文平明にして簡潔、文ならざる武人の行脚紀遊の文と

して、格別の風味あるを覺えた。佐藤君は大學を出てから、加島銀行に入り、今日あるに至つた温雅の好紳士で、兼て文學を解する風流人である。祖父逝いて二十五年その忌を記するため、先君の記文を集めて印行し、それを交友に頒つの特志は殊勝な心掛けてある。丙午紀行一帙は、別に觀察の奇警があるのでもなく、行文に精彩があるといふでもないが、弘化年代の地方色を知るには、一種の趣味ある、文字と云ふことが出来る。佐藤君が文に巧にして、文を好むのも、遠く祖父桃園先生の脈管に因由して居るかと思ふとまた別様の趣味が覺えられる。今日は小包がよく来る日と見え、午後には又村松梢風君から、近著「談話賣買業者」を送つて來た。これは村松君が、中央公論や改造で公にした隨筆談話集で、男を賣つた女の話、男の運と女の運、死の前の家康、平賀源内の死、名越一族の最後など、史實に新しい解釋を加へたものや、全く想像の産物と云つて宜い現代の事件中、呼吸もつかせず面白く讀ませる手腕は感心至極である。殊に面白いのは巻頭の「談話賣買業者」で、遊廓や田園や都會やを題材とした中にも、最も探偵小説的の興味があるのは、「談話賣買業者の話」と云ふ一項である。藝術的の創作物と、普遍的な講談との中間にあつて、情話とか隨筆とか、説話とか云はれて居る此の種の讀物が、讀書階級に多くの歸依者を有つて居るの

は、今に初つたことではない。大正說話家の多くは、その作品が藝術的の創作として取扱はれん事を、最後の目的として居るらしいが、これは藝術でない、夜も日も明けぬと云ふ、一種の大勢に盲從した傾向で、喜ぶべき態度とは云はれない。田中貢太郎にしても、大泉黒石にしても、また村松梢風にしても彼等は小説家に對する大説家として何故、堂々と押進むことを考へぬのであらう。藝術品で無くても、好い興味ある讀物でさへあれば、讀者は喜んで愛讀するであらう。

十三、丙午紀行(佐藤桃園遺著)

本書は、藩政時代に仙臺の佐藤桃園が、仙臺より藝州に到れる、其の往復の紀行文二巻と、附録東海道名所古跡略記とを合せて三巻とす。著者桃園の孫に當る佐藤密氏は、王父の祭祀に際し、其遺著の一たる本書を刻して舊門有志に頒布したるものなるが、此紀行文中に現はるは、陸奥、下野、常陸、下總、武藏、相模、伊豆、駿河、遠江等凡そ三十四ヶ國にして、行文平易簡明にして、當時の驛路の實狀目のあたりに見ることが如き心地せらる。附録の東海道名所古跡略記に至りては、單行本として立派な名所古跡記たる價値を認むべく、又巻頭に掲げたる日本總驛傳地圖は、江戸時代の極盛期の出版物らしく、三百諸侯と中心江戸と

の交通線を一目の下に明かにせる珍版なり。今日旅行に關しては、鐵道の旅行案内を始め種々の書冊あれども、徳川時代に於ける驛路の風物を目前に見、又名所舊跡の由来を知るに於て、本書の如きは稀に見る珍本として推薦するに躊躇せず。

(發賣所)

神田今川小路

清水書店

定價參圓五拾錢)

(大正十一年八月一日「東洋藝術」第七卷)

第八號)

大正十一年四月二十五日 印刷
大正十一年六月二十日 再版發行
大正十一年八月二十八日 三版發行
大正十三年十月二十九日 訂正增補改版四版發行

定價 金貳圓五拾錢

著作
所權有

丙午紀行

校訂者

佐藤 密

發行者

葉多野 太兵衛

印刷者

武居 菊藏

印刷所

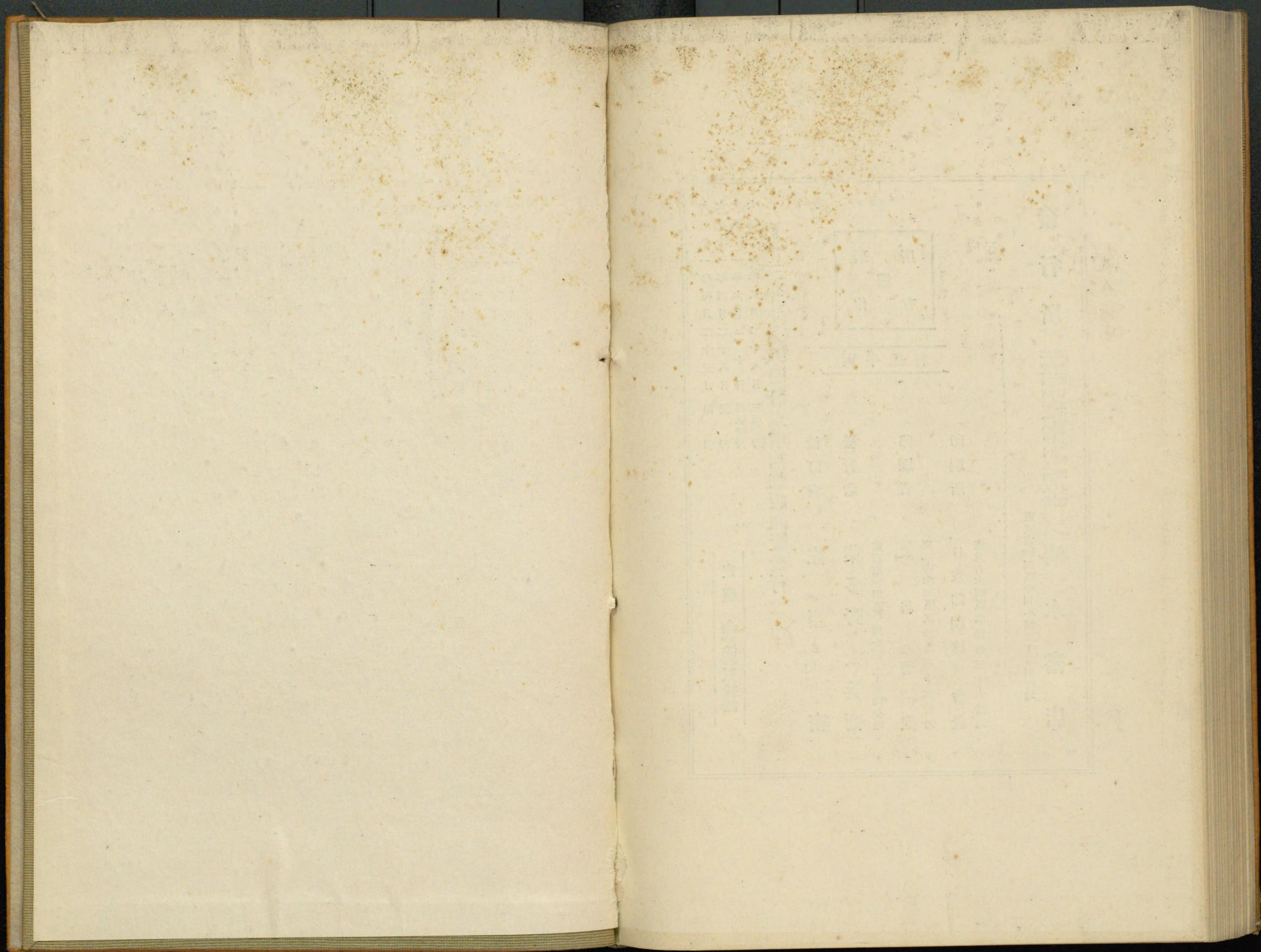
日東印刷株式會社
東京市本郷區眞砂町三十六番地

東京市神田區今川小路二丁目四番地

發行所

電話四谷一〇、四八四八番
振替口座東京七四四七番

清水書店



160
941

